

# CRNA 主調査:インタビュー調査レポート

## 中国カントリーレポート

### 中国の幼児教育における洞察: 未就学児のレジリエンスと社会情動的スキルの育成

周 念麗 & 朱 家雄

中国華東師範大学教育学部 (ECNU)

#### 要旨

本レポートは、CRN がアジア 8 か国で実施した国際異文化研究に基づき、中国で行った調査の結果を報告するものである。中国の幼稚園の園長 5 名と現場保育者 5 名を対象に個別インタビューを行い、幼児の社会情動的スキル (SES) とレジリエンスの発達に対する認識と実践を調査した。

この 2 つの概念に対する調査参加者の認識を調査した結果、園長たちは幼児の社会情動的スキルについてある程度理解しており、感情認識、感情マネジメント、共感力の 3 要素、そしてレジリエンスに関連付けていることが分かった。一方、現場の保育者たちにとって社会情動的スキルは馴染みのない言葉であった。園長たちは、幼児の育成方法において、能力、年齢、浸透性の観点から、自らの文化伝統を取り入れ、幼児の社会情動的スキルを育むことが必要であると考えていた。

園長たちは「自己治癒力」や「自己管理・抑制」などの側面からレジリエンスの意味を理解することに重点を置いていた。レジリエンスの意味を学ぶ主な手段としてインターネット、教育ソフトウェア、書籍、講義などが挙げられた。現場の保育者たちはレジリエンスという言葉をほとんど知らなかったが、「レジリエンス」の 2 つの側面、つまり「スムーズな適応」や「回復」の状況とも関わる「困難」や「逆境」について、比較的よく理解していた。

「社会情動的スキル」や「レジリエンス」の知識の応用について調査した結果、この調査に参加した園長や保育者たちは現場の実践においてレジリエンスの概念をあまり応用していないことが判明した。また、中国の県級<sup>1</sup>幼稚園ではレジリエンスという概念の応用、手法、教材が依然として不足していることが分かった。

この調査の結果は、中国の幼児教育セクター (特に県レベル) において社会情動的スキルとレジリエンスの概念を普及させる必要があることを示唆している。この 2 つの概念に対する園長や保育者たちの理解と応用をあらゆる手法で向上させることにより、子どもの社会情動的スキルの実践的習得を促進し、優れたレジリエンスを育むことができるようになるだろう。

**キーワード:** 中国、国際異文化研究、幼児の社会情動的スキル (SES) とレジリエンス、園長、現場保育者

---

<sup>1</sup> 中国の行政区分は、省級・地級・県級・郷級の 4 層制となっている。

## 1.0 はじめに

### 現在の中国における幼児教育の政策方針

中国政府が 2010 年に幼児教育の普及を提唱して以来、幼児教育は「普遍的アクセスと質」を確保する過程を経てきたが、現在は高水準の質を追求する重要な時期を迎えている。高水準の幼児教育とは、すべての未就学児に普遍的かつ高品質の幼児教育を提供し、道徳、知性、体の健康、美的感覚、作業能力の総合的な発達により社会主義建設の継承者とならしめることを意味する。公平な幼児教育が広く提唱される一方で、未就学児の心身の健康や社会性の発達にも多くの注意が向けられている。

### 社会情動的スキルとレジリエンスに関連する政策文書の意図

中国教育部が 2012 年に発行した「3～6 歳児の学習と発達に関するガイドライン」では、社会分野における幼児の学習と発達のプロセスは、社会性を継続的に向上させ、人格の健全な基礎を築くプロセスであると明確に述べている。対人コミュニケーションと社会的適応力は、幼児の社会的学習の中核であり、社会性発達の基本的な工程でもある。幼児の精神的健康の発達を促進するには、温かくリラックスした心理的環境を作り、幼児の安心感と信頼感を育むことに重点が置かれる。家庭、幼稚園、社会が連携して、幼児のために温かく思いやりに満ちた平等な家庭と集団生活の環境を作り、良好な親子関係、保育者と園児の関係、友達関係を確立することにより、幼児が前向きで健全な対人関係において安心感と信頼感を得て、自信と自己肯定感を育めるようにする。

さらに、幼児が感情を適切に表現し、制御する方法を学ぶことを手助けする必要性についても強調している。幼児に他人と感情を共有するよう励まし、自らの感情を表現させ、適切な指導を提供する。子どもが落ち込んでいる時は積極的に事情を尋ね、否定的な感情を払拭できるよう手助けする。

中国教育部が 2022 年に発行した「幼児保育・教育の品質評価ガイドライン」では、「保育者は前向きかつ楽観的で幸福な感情を維持し、友好的で支援的な態度と行動で子どもたちに接し、すべての子どもを平等に扱わなくてはならない。子どもが日常の活動で自信と落ち着きを感じ、自信をもって自らの感情や様々な意見を率直に表現できるようにしなくてはならない」と述べている。

上記の中国政府の政策方針と主な意図を考慮すると、この調査は深い実用的意義をもつと言える。

本レポートは、CRN がアジア 8 か国で実施した国際異文化研究に基づき、中国で行った調査の結果を報告するものである。中国の幼稚園の園長 5 名と現場保育者 5 名を対象に個別インタビューを行い、幼児の社会情動的スキル (SES) とレジリエンスの発達に対する認識と実践を調査した。

## 2.0 調査目的

(i) 幼児の社会情動的スキルとレジリエンスの概念に対する中国の幼稚園の園長と現場の保育者の理解度を、個々のケーススタディとして調査する。

(ii) 中国の幼稚園の園長と現場の保育者が子どもの社会情動的スキルとレジリエンスに及ぼす発達の意義の解釈を調査する。

(iii) 中国の幼稚園の園長と現場の保育者が子どもの社会情動的スキルとレジリエンスの発達を促進するために実施している取り組みを調査する。

### 3.0 方法論

中国の県級市にある幼稚園の園長 5 名と現場保育者 5 名を選定し、個別に 1 対 1 のインタビューを実施した。次に、インタビューの結果を「園長クラス」と「現場保育者」の 2 グループに振り分け、分析を行った。

#### 調査参加者の背景情報

この調査では、まず調査参加者を 2 つのグループに振り分けた。1 つは「園長」クラスとして分類した園長グループ、もう 1 つは「現場保育者」クラスとして分類した主任保育者と現場保育者グループである。下記の表は調査参加者の特性情報をまとめたものである。

表1: 園長の属性と経歴

参加者の役職 ／番号		施設名	施設の種類・性質	担当園 児の年 齢	勤務 年数	現職の 勤務年 数	性別	年代
園長	1	A 幼稚園	省 1 級公立幼稚園 (私立から転向)	2-6 歳	15 年	5 年	女性	40~49 歳
副園長	2			2-6 歳	25 年	3 年	女性	40~49 歳
園長	3	B 幼稚園	省 1 級公立幼稚園 (私立から転向)	3-6 歳	36 年	30 年	女性	50~59 歳
副園長	4			3-6 歳	24 年	7 年	女性	40~49 歳
園長	5	C 幼稚園	省 1 級公立幼稚園	3-6 歳	22 年	10 年	女性	40~49 歳

表 2: 保育者の属性と経歴

参加者の役職	番号	施設名	施設の種類・性質	担当園 児の年 齢	勤務 年数	現職の 勤務年 数	性別	年代
主任保育者	1	C 幼稚園	省 1 級公立幼稚園	3 歳	16 年	7 年	女性	30~39 歳
主任保育者	2	D 幼稚園	省 1 級公立幼稚園 (私立から転向)	4 歳	25 年	3 年	女性	40~49 歳
現場保育者	3	E 幼稚園	省 2 級私立幼稚園	4 歳	15 年	10 年	女性	30~39 歳
現場保育者	4	A 幼稚園	省 1 級公立幼稚園 (私立から転向)	5 歳	5 年	2 年	女性	20~29 歳
現場保育者	5	F 幼稚園	省 2 級公立幼稚園	3 歳	6 年	4 年	男性	20~29 歳

まず、表 1 と調査参加者の幼稚園について簡単に説明する。園長グループに関しては、園長たちは全員 Z 省の 1 級幼稚園、すなわち Z 省のトップクラスの幼稚園に勤めている。中国の包括的な幼児教育政策の流れを受けて、かつての企業経営幼稚園や私立幼稚園はすべて公立に切り替えている。そのため、今回のインタビュー結果における、子どもの社会情動的スキル

とレジリエンスの発達に対する園長(または副園長)たちの認識と実践は、過去の私立幼稚園と現在の公立幼稚園での経験を部分的に反映していると言える。

保育者グループについては、主任保育者(保育者 1と2)は保育と教育の実践において園長を補佐する任務を担っている。現場保育者(保育者 3~5)は毎日園児のクラスを担当する保育者である。表 1 と表 2 から、本調査に参加している現場保育者たちの勤務先は、1 級と 2 級(1 級幼稚園の下位)の公立幼稚園、私立幼稚園、および郊外の幼稚園であることが分かる。すなわち、10 名の幼稚園の園長と保育者は、中国県級市の幼稚園を代表する様々なレベルと種類の県級幼稚園で勤務しているのである。

こうした県級幼稚園に焦点を絞るのは、子どもの「社会情動的スキル」と「レジリエンスの発達」に関連して、中国の一般的な幼稚園で働く管理職や保育者の認識と実践を深く理解するためである。

## 4.0 調査結果

以下に、子どもの「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の発達に対する園長や保育者たちの認識と実践について報告する。

### 4.1 概念認識の調査結果

園長や保育者たちの認識に関する調査結果を、それぞれ「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という 2 つのキーワードに基づいて報告する。

#### 4.1.1 社会情動的スキルという言葉に対する認識

まず、「社会情動的スキル」に対する園長たちの認識を表 3 にまとめる。

表 3: 園長たちの「社会情動的スキル」という言葉に対する認識

	この言葉を聞いたことがありますか？	「社会情動的スキル」をどういう意味でとらえていますか？
園長 1	3 <sup>2</sup>	私は、社会情動的スキルとは、子どもたちが安定した感情をもち、共感することができ、他人を理解し、異なる感情をもつ人々を進んで受け入れ、他人の立場で考えることができるという意味だと考えています。安定した感情と共感力を育むことは非常に重要だと思います。彼らはいわゆる「レジリエンスが高い子どもたち」でもありません。  子どもたちの社会情動的スキルを育むことは非常に重要だと思います。

<sup>2</sup> 1. この言葉を知っており意味もよく知っている  
2. この言葉を知っており意味は少し知っている  
3. この言葉は知っているが意味は知らない  
4. この言葉も意味も知らない

園長 2	3	<p>私は、社会情動的スキルとは、社会性の発達に共鳴する能力、社会に注意を払う能力、共感する能力、自分の感情を制御し、社会にうまく適応する能力であると理解しています。</p> <p>私たちは、前向きな考え方をもち、楽観的で自信があり、伝統的な中国文化を見出し、広めることができる子どもを育てるべきだと思います。</p> <p>社会情動的スキルが高い子どもは、高度な学習能力と適応力をもつ子どもに違いがないと考えています。</p>
園長 3	1	<p>社会情動的スキルとは、社会的適応力や対人コミュニケーションなど、知識、技能、態度を指す総合的な能力です。</p> <p>中国では、感情的に安定し、革新的で、国際社会の変化に適応できる子どもを育てるべきだと思います。</p> <p>私は、社会情動的スキルが高い子どもは、活動的で明るく、挫折に直面しても打たれ強く、様々な変化に対処でき、前向きで活発で、社会適応力が高いと考えています。</p> <p>子どもの社会情動的スキルを育むことは非常に重要だと思います。</p>
園長 4	2	<p>社会情動的スキルとは、自分の感情を認識し、管理・制御するなどの能力を意味すると理解しています。</p> <p>私は、自分の感情を管理できる子どもを育てるべきだと考えています。</p> <p>社会情動的スキルが高い子どもは、自分の感情を認識することができ、前向きで、明るく、正直で、自分が今どう感じているかを知っており、他人の感情にも気づくことができます。例えば、怒っている時は自己抑制する方法を、激怒している時は憤怒を抑える方法を見つけるなど、自分の感情を管理することができます。</p> <p>私は、社会情動的スキルが高い子どもを育てることは非常に重要だと思います。</p>
園長 5	3	<p>「社会情動的スキル」の意味について私が理解しているところは、社会の中で自分の感情をコントロールし、自己管理することを学ぶ能力です。</p> <p>私は、子どもたちが前向きで楽観的であり、気分が落ち込んでいるときに自己抑制する能力とスキルを養うべきだと考えています。繰り返し指導する能力: 保育者は幼稚園の日常生活で子どもたちが感情を同じように表現するところをよく見かけます。そのため、私たちは様々な方法で子どもたちが色々な感情を出せるよう繰り返し指導することにより、子どもたちが感情を十分に理解できるようにします。レベル別指導の方法論: 保育者は異なる年齢の子どもたちの特性に基づいて、子どもたちが色々な感情を出せるように適切に指導します。イマージョン指導: 保育者は子どもたちが知らないうちに感情マネジメント能力が向上しているのを実感できるような方法で子どもたちの感情を発達させるカリキュラムを考案します。興味に基づく指導: 保育者は、子どもたちの感情マネジメント能力を育成する過程で、子どもたちの興味に焦点を当てる必要があります。共同の育成と指導: 保育者は、保護者のリソースを活用し、子どもたちの感情マネジメント能力を育成するために子どもたちの家族としっかり協力し合いながら取り組む必要があります。</p> <p>子どもたちの社会情動的スキルを育成することは非常に重要だと思います。</p>

表 3 をみると、園長たちが謙虚だったため大半が回答 3 (この言葉は知っているが意味は知ら

ない)を選んだことが分かる。このことは、園長たちがこの言葉を洗練された洞察力で解釈しようと試みたことを示している。園長と副園長の多くが「感情」の観点から「社会情動的スキル」の意味を理解しており、子どもの感情認識、感情マネジメント、共感力の3つの側面を「社会情動的スキル」と、「社会性」の観点からは「社会的適応力」と関連づけていた。教育学の観点からは、園長たちは幼児教育と伝統文化を結び付ける意義について言及しており、能力レベル、年齢差、イメージ指導を考慮した子どもの発達の哲学についても詳しく説明していた。園長たちの考えでは、「社会情動的スキル」が高い子どもとは、感情制御や社会的適応力を備えた子どもであるとしていた。

園長たちは、子どもの「社会情動的スキル」を育成することが非常に重要であることで意見が一致していた。

表4は、「社会情動的スキル」に対する現場の保育者たちの認識を分析した結果をまとめたものである。

表4:保育者たちの「社会情動的スキル」という言葉に対する認識

	この言葉を聞いたことがありますか？	「社会情動的スキル」をどういう意味でとらえていますか？
保育者1	2	<ol style="list-style-type: none"> <li>私は、社会情動的スキル(社会学の専門用語)には、主に3つの側面、すなわち「健全な自己認識、自己制御、自己肯定感」、「社会的認識と対人関係のスキル」、「革新的な問題解決と責任ある意思決定」があると考えています。社会情動的スキルは、プレッシャーの対処、対人コミュニケーション、チームワーク、創造的な意思決定など、非知的能力(Non-intellectual abilities)の発達に貢献するだけでなく、知的要因にも重要な影響を及ぼします。従って、社会情動的スキルは将来の人材競争力の重要な要素になります。</li> <li>優れた社交力、自己制御、挫折に直面してもあきらめない精神。</li> <li>自己認識、自己制御、責任ある意思決定、対人スキル、社会的認識を備えた子ども。</li> <li>こうしたスキルは非常に重要だと思います。</li> </ol>
保育者2	3	該当なし
保育者3	3	該当なし
保育者4	3	該当なし
保育者5	3	該当なし

表4の回答をみると、「社会情動的スキル」という言葉は、1名の主任保育者(保育者1)を別として、中国県級市で働く現場保育者たちにとって馴染みのない言葉であることが分かる。4名の保育者の回答は、彼らが質問を全く理解していないことを示している。

#### 4.1.2 レジリエンスの認識

「レジリエンス」の調査は 2 部構成で実施し、レジリエンスという言葉の理解度を尋ねる質問と、4～6 歳児にとっての「困難」や「逆境」とは何かを説明してもらった質問を行った。

##### 4.1.2.1 園長や保育者たちの「レジリエンス」という言葉に対する認識の調査結果

下記の表 5 と表 6 は調査結果をまとめたものである。

まず、園長たちの「レジリエンス」に対する認識を以下の表 5 に示す。

表 5: 園長たちの「レジリエンス」という言葉に対する認識

	この言葉を聞いたことがありますか？	「レジリエンス」をどういう意味でとらえていますか？	どこでこの言葉を知りましたか？
園長 1	3 <sup>3</sup>	「レジリエンス」とは、健全な心理的特質と、必要に応じて感情や気分を制御する能力のことだと考えています。レジリエンスがある子どもは、強い忍耐力をもち、外的要因に対して精神的に脆弱ではないはずで  レジリエンスは子どもが速やかに環境に適応するのに役立つので、子どものレジリエンスを育むことは重要だと思います。	書籍
園長 2	3	私が知っている「レジリエンス」とは、感情をコントロールする力が強く、困難や挫折に直面しても前向きに考える力、自信や自己制御を育む力、そして様々な側面から全体を把握する力があることを意味します。  レジリエンスがある子どもとは、対人スキルに優れ、困難に立ち向かい、変化する環境に常に適応できる子どもだと思います。私は、子どものレジリエンスを育むことは重要だと考えています。	インターネット
園長 3	1	レジリエンスとは、動的な受容力を意味します。  強靱なレジリエンスをもつ子どもは、様々な変化に直面し、多様な環境に適応することができ、気持ちを調整し、前向きで楽観的な考え方を維持することができます。	書籍、研修、コミュニケーション
園長 4	2	1. レジリエンスとは、動的な感情をコントロールする力を意味します。レジリエンスがある者は様々なシナリオで柔軟に対処するのが得意で、様々な状況において自己制御する力があります。  2. レジリエンスがある子どもは、困難な状況に陥ったり、気分が落ち込んだりしても、自分のやり方で精神的に回復することができます。長い間精神的な負担を感じることはありません。精神的に健全で、自己制御と自己回復	学術雑誌、教育ソフトウェア

<sup>3</sup> 1. この言葉を知っており意味もよく知っている  
2. この言葉を知っており意味は少し知っている  
3. この言葉は知っているが意味は知らない  
4. この言葉も意味も知らない

		力をもっています。 3. 子どものレジリエンスを育むことは非常に重要です。	
園長 5	3	レジリエンスとは、感情を自己統制する力だと思います。 いわゆる「レジリエンスがある子ども」とは、気持ちが落ち込んだりしても、自分で安定した気分調整できる子どものことです。 子どものレジリエンスを育むことはとても重要だと思います。	インターネット

表 5 をみると、園長たちの回答は 1 から 3 までバラツキがあるものの、レジリエンスという言葉に対する認識は洞察力に富んだものであることが分かる。園長や副園長たちは主に「自己回復力」と「自己抑制・制御」の側面から「レジリエンス」の意味を解釈していた。

彼らの「レジリエンス」が高い子どものイメージは、自己抑制、自己回復力、自己統制を備えた子どもであった。

レジリエンスについて学んだ情報源として彼らが答えたのは、インターネット、教育ソフトウェア、書籍、講義と、多岐にわたっている。

子どもの「レジリエンス」を育成する重要性については、全員の意見が一致していた。

次の表 6 では、現場保育者たちの「レジリエンス」に対する認識に関する分析結果を示す。

表 6: 保育者たちの「レジリエンス」という言葉に対する認識

	この言葉を聞いたことがありますか？	「レジリエンス」をどういう意味でとらえていますか？	どこでこの言葉を知りましたか？
保育者 1	2	1. レジリエンスは心理学的概念だと考えています。変化していく環境に人の心理状態や行動がどのように反応するかを説明するためによく使用されています。これは柔軟な環境における動的なプロセスです。人は外の世界の変化に合わせて自分自身を調整し、変化の中で環境に適応するために動的に自己抑制を行います。プレッシャー、困難、挫折などの逆境に直面すると、安定した感情と前向きな態度を維持するレジリエンスが作用して、迅速に回復、適応し、こうした困難に効果的に対処することができます。レジリエンスの特徴は、逆境を経験した後も人生に対して楽観的で自信に満ちた前向きな姿勢を維持できることです。これは、人生の様々な変化や困難に適応していく上で役立つものであり、人生の成功や幸福にも寄与すると思われます。 2. 挫折に対して強い耐性をもつ子どもは心理的に優れた資質をもっています。 3. 私はレジリエンスがとても重要で必要だと思います。	書籍と講義
保育者 2	4	該当なし	該当なし

保育者 3	4	該当なし	該当なし
保育者 4	3	該当なし	インターネット
保育者 5	3	該当なし	書籍とインターネット

表 6 をみると、中国県級の現場の保育者や主任保育者たちにとって、1 名の主任保育者(保育者 1)を別として、「レジリエンス」は馴染みのない言葉であることが分かる。彼らはこの言葉の意味を全く知らなかったのである。

#### 4.1.2.2 園長や保育者たちの「困難」、「逆境」、「うまく適応する」、「立ち直る」に対する認識に関する調査結果

表 7 と表 8 は、園長や保育者たちが「あなたが想定する 4 歳～6 歳の子どもにとっての『困難』や『逆境』とはどのようなことですか？」と「あなたが想定する 4 歳～6 歳にとっての『うまく適応する』『立ち直る』とはどのようなことですか？」という調査の質問に回答した結果を表したものである。

まず、表 7 は、4～6 歳児が直面する「困難」や「逆境」がどのようなものかについて、園長や保育者たちが回答した内容をまとめている。

表 7: 幼児の「困難」や「逆境」に対する園長や保育者たちの理解

	あなたが想定する 4 歳～6 歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」とはどのようなことですか？
園長 1	生活や学校で子どもの心理状態に何らかの影響を与えるような問題を意味します。
園長 2	子どもが対人コミュニケーションや感情のコントロールの方法や、誰かに打ち明けるやり方を知らないことを意味します。緊急事態には途方に暮れてしまうようなことです。
園長 3	自分の知識の及ばない能力、スキル、コミュニケーションが関わる困難、取り組むには難しく、あらかじめ決めた目標を達成するには無理な課題、あるいは突然の変化や出来事を意味します。
園長 4	子どもの望みが満たされず、気分が落ち込んでいることを意味します。友達との関わり合い、ゲーム、学習、活動への取り組みで困難に直面する場合が挙げられます。両親とのコミュニケーションにおける感情的な障害の場合もあるでしょう。
園長 5	自分で解決できない困難や他人の助けを借りても達成できない課題に直面し、心理的な挫折や恐怖を引き起こすことです。安定した感情をもつ子どもは逆境でも常に解決策を見つけることができます。

保育者 1	日常の活動で解決できない問題など、人生で直面するつまずき、困難、挫折を伴う状況を意味します。
保育者 2	子どもたちが人生、勉強、ゲーム、その他のシナリオで困難に直面した時に、自分自身と友達の知恵で問題を解決するやり方を意味します。
保育者 3	子どもが心理的な不幸に遭遇したり、自分の能力を超えた絵を描くなどの難しい課題を達成できなかったりすることです。
保育者 4	<p>学習の困難: 子どもが理解や習得の難しい知識やスキルに遭遇する場合があります。</p> <p>社会的交流の困難: 子どもが友達とうまく付き合えず、コミュニケーション力に欠け、他人と協力するのが難しく、他人と頻繁に対立または喧嘩することが挙げられます。</p> <p>感情の困難: 子どもが情緒不安、感情のコントロール困難、不安やうつが頻繁にあるなど、感情面での困難に直面する場合があります。</p> <p>適応の困難: 子どもが幼稚園に入園した直後に感じる分離不安、クラスや先生が変わった後の適応の問題など、新しい環境や変化に適応するのが困難な場合があります。</p> <p>特別支援: 子どもの中には ADHD、自閉症スペクトラム障害、言語発達遅滞など、学習／発達において特別支援を必要とする場合があります。</p>
保育者 5	<p>困難とは、子どもが自分の過去の経験からは理解できない、または解決できない問題に直面することを意味します。</p> <p>逆境とは、生活や遊びの過程において子どもの行動が長期的に停滞したり行き詰まったりすることを意味します。</p>

表 7 の回答をみると、園長、主任保育者、現場の保育者のいずれも「困難」と「逆境」の意味についてほぼ明確に説明している。曖昧な理解を示した保育者が 1 名いたものの、それ以外は皆、4～6 歳児にとっての「困難」と「逆境」とは自分で制御、解決、対処できないことから生じる感情の不安定さや恐怖によって引き起こされる状況であり、勉強、生活、遊び、特に対人コミュニケーションや社会的適応力に反映されることを明確に認識していた。

表 8 は、子どもが「うまく適応する」時や「立ち直る」時について園長や保育者たちが回答した結果をまとめたものである。

**表 8: 幼児の「うまく適応する」と「立ち直る」に対する園長や保育者たちの理解**

	あなたが想定する 4 歳～6 歳にとっての「うまく適応する」「立ち直る」とはどのようなことですか？
園長 1	<p>うまく適応する: 子どもが自分のやり方で人生の困難や問題を解決し、速やかに適応できることを意味します。</p> <p>立ち直る: 子どもが成長の過程で困難や問題に直面した時に、ある程度心理的に影響を受ける可能性があるものの、自己抑制や大人の助けによって精神的な健康を取り戻すことを意味します。</p>

園長 2	うまく適応する:新しい環境に非常にうまく適応できることを意味します。感情的にかなり安定し、他人と自然で調和のとれたコミュニケーションを行うことができます。  立ち直る:身体的機能と心理状態が自然でリラックスした状態になるよう速やかに調整を行うことを意味します。
園長 3	立ち直る:子どもが外の世界や外部者からサポートを受けて、または自己調整によって、元の前向きな状態を取り戻すことを意味します。
園長 4	子どもたちは、親や保育者に気持ちをぶつけたり、友達と仲良くしたり、お気に入りのおもちゃで遊んだり、おいしいものを食べたり、漫画を見たり、絵本を読んだり、音楽を聴いたり、スポーツをするなどしてネガティブな感情を発散させ、自分の好きなやり方で気持ちを落ち着けることができます。
園長 5	うまく適応できる子どもとは、新しい環境でもスムーズに周囲に適応できる子どものことです。  立ち直るとは、心理的な落ち込みに直面した時に気持ちを調整して正常に戻る力を意味します。
保育者 1	子どもが生活の中で様々な環境、社会関係、出来事に直面した時に、自分の行動、感情、理解を調整し、適切に適応して反応する力です。
保育者 2	うまく適応する:子どもを取り巻く環境、生活習慣、世話をする人に変化があった時、子どもが新しい環境に順応し、スムーズに適応できることを意味します。
保育者 3	幼稚園に入園したばかりの時期に分離不安を乗り越えるなど、自分の生活環境に順応し、感情的な安定を取り戻すことができることです。
保育者 4	問題を解決し、新しい経験を得て、良好な感情状態に戻ることです。
保育者 5	うまく適応する:子どもが自分自身の力や他人の助けを得て、環境、人、様々な出来事に自然に順応することを意味します。  立ち直る:子どもの心理的および身体的な状態が時間と媒体を通じて最良の状態に再調整されるプロセスを意味します。

調査参加者の回答によると、4～6 歳児の「うまく適応する」と「立ち直る」の理解において、園長と保育者との間に大きな差異はなかった。参加者は皆、「調整」や「回復力」などのキーワードに言及しており、主に 4～6 歳児の自己調整力や外の世界／大人の助けによる心理的な回復力に焦点を当てていた。

上記をまとめると、中国県級市の園長たちは「社会情動的スキル」と「レジリエンス」についてある程度の理解があったが、現場の保育者たちはこれらの言葉を十分に理解していなかった。ただし、4～6 歳児の「レジリエンス」に伴う 2 つの側面 - 否定的な「困難」「逆境」と前向きな「スムーズな適応力」「回復力」- に対する保育者たちの認識はむしろ豊かであり、レジリエンスの意味と一致していた。

## 4.2 実態調査の結果

いわゆる「実態調査」とは、「レジリエンス」と保育・教育の現場における実務を結びつけるインタビュー項目を意味する。次に、調査に参加した園長や保育者たちによる「レジリエンス」概念の応用や提示したシナリオの選択、評価、保護者へのフィードバックについてまとめ、分析する。

### 4.2.1 「レジリエンス」概念の応用

表 9 は、「レジリエンス」概念の応用において、園長や保育者たちの考慮、具体的な取り組み、教材についてまとめたものである。

表 9: 「レジリエンス」概念の応用における園長や保育者たちの考慮、取り組み、教材

	考慮しているか	実践している取り組み	教材／研修
園長 1	該当なし	該当なし	該当なし
園長 2	該当なし	該当なし	該当なし
園長 3	はい	子どもが困難、挫折、抑鬱などの理由で落ち込んでいる時は、身体的な接触、言語によるコミュニケーション、個別の指導、保護者との面談、前向きな励まし、ビデオや絵本などの気分転換など、様々な戦略を使って、子どもが困難に前向きに対処できるように手助けします。	該当なし
園長 4	はい	関連するテーマの活動を実施し、関連する絵本を提供しています。当園では「落ち着くコーナー」を設けています。	該当なし
園長 5	該当なし	該当なし	該当なし
保育者 1	はい	満足遅延を経験させ、適切な批判を与えています。	該当なし
保育者 2	はい	子どもの心理的発達の過渡期に注目し、子どもが自分自身を表現し、自信を高める機会を設けるようにします。例えば、心の健康の授業やあらゆる種類の自己主張をする場を構築するなどです。	該当なし
保育者 3	該当なし	子どもたちに安全で安定した環境を提供し、自分の感情を適切に表現する方法を学ぶように指導し、泣いたり大声を出したりなどで適度に発散させ、挫折に対する耐性を高めるよう手助けするべきです。また、子どもたちが勇敢に問題に立ち向かい、解決するよう励ますとよいです。たとえば、ゲームに負けたり、友達と喧嘩したりした場合、保育者はそのような状況に対処する方法を子どもたちに教えることができます <sup>4</sup> 。	該当なし

<sup>4</sup> 仮説。将来関連のコースが開設された場合に講じる可能性のある対応策。

保育者 4	はい	1. 好ましい雰囲気を作り、子どもたちに多様な学習機会と課題を提供し、試行錯誤するよう励まし、困難な問題に直面した場合にも対処できるよう自信と忍耐力を養います。2. 子どもたちが感情を表現できるように指導し、自分の感情を理解してコントロールすることを学ぶと同時に、互いが抱く感情を理解する力を育みます。3. 協力と助け合いの奨励: 幼稚園の活動用に集団行動のシナリオを複数作成し、子どもたちが助け合い協力しながら学び成長できるようにします。4. 子どもたちが困難に直面することを奨励する: 新しいタスクに取り組みせたり、難しいことを克服させたりするなど、適切な難易度の困難に直面させることにより、ある程度の成功を収めた喜びと満足感を体験させ、レジリエンスを高めるようにしています。	該当なし
保育者 5	はい	保育者はテーマ別指導の過程でテーマに基づく心理教育を選択的に活用することができます。例えば、「自分はお兄ちゃん／お姉ちゃんになった」という感情の中で子どもの理解力と成長感を高める、ロールプレイで子どもたちの情動発達に重点を置くなどです。	クラスにあわせて作成した省級教科書

表 9 をみると、園長たちが所属する 3 ヲ所の幼稚園のうち、会話、絵本、保護者とのコミュニケーションを通じて「レジリエンス」概念の応用に取り組んでいるのは 1 ヲ所のみであることが分かる。幼稚園の大半が教科書を使用しておらず、省が作成した教科書を使用しているのは 1 ヲ所のみである。

保育者に関しては、3 名がレジリエンスの概念を応用しているが、満足遅延を経験させる、自信や心理教育の価値を高めるなどの取り組みは効果がないように思われた。残り 2 名の保育者はレジリエンスの概念を応用していないが、今後実施することについて野心的な仮説を述べている。

上記をまとめると、中国県級都市の幼稚園では「レジリエンス」概念の応用、手法、教材の活用が依然として不足していることが分かった。このことは園長と現場保育者の両方に当てはまる。

#### 4.2.2 「レジリエンス」のシナリオ選択

インタビュー項目の Q6 は、幼稚園と日常生活の場面において「レジリエンス」のスキルに関連する 4 つのシナリオを提示している。次のセクションでは、表 10～13 に調査結果をまとめている。中国の園長や保育者たちは 4 つのシナリオから 2 つを選び、各シナリオでどのように子どもに接するか、それはなぜかを説明している。

表 10:シナリオ 1「友だちから仲間外れにされた(仲間に入れてもらえなかった)」

このシナリオを選んだ参加者	保育者としてどう関わるか	それはなぜか
園長 1	保育者は必要に応じて介入することができます。まず仲間外れにした理由を理解し、その理由に基づいて介入する必要があります。	該当なし
園長 2	私はその子どもと一緒に理由を見つけるようにします。その子どもの長所と短所、なぜ仲間外れにされたのかを分析します。また、集団指導、個別の会話、様々な種類の友達作りゲームを通じて、その子どもに友達を作る方法を教えます。	該当なし
園長 4	まず、子どもが仲間外れにされた理由を見つけ、その子どもが好きな方法でコミュニケーションを取り、仲間外れにされた悲しみを和らげます。次に、ほかの子どもたちを招き、その子どもと交流させ、プレゼントを交換させたりします。	子どもたちは幼いため、スポーツや音楽などを通じてネガティブな感情を発散できる大人とは異なり、表現能力が限られています。一度挫折や困難に直面すると、ネガティブな感情を長時間落ち込んだり泣いたりする行動に変えることしかできません。そのため、保育者は子どもが仲間外れにされる理由を突き止めて、状況に応じた救済策を講じる必要があります。保育者は子どもの隠れた感情を理解した上で子どもに接する必要があります。
保育者 1	まず、なぜ仲間外れにされたのかを子どもに尋ね、次に他の子どもたちとどのようにコミュニケーションをとったかを突き止めて、その子どもが状況を変える機会を見つけられるよう手助けします。	該当なし
保育者 2	私たちは子どもたちを守り、教育し、説得し、対人コミュニケーションを正しい方向に向けるよう励ますことを学ばなくてはなりません。	該当なし
保育者 3	<ol style="list-style-type: none"> <li>その子どもを慰め、気持ちを落ち着かせます。仲間外れにされることは誰にでも起こり得ることで、普通のことだと子どもに伝えます。仲間外れによって精神的に傷つかないように気を付けます。</li> <li>その子どもが友達と積極的に交流し、おもちゃや本を共有し、一緒に遊ぼうと誘えるように励まします。</li> <li>社会的インタラクションの基本的なやり方をいくつか子どもに教えます。たとえば、おいしい食べものや楽しいおもちゃがある時に友達と分かち合う方法や、ほかの子どもたちが遊んでいるゲームにまざりたい時には丁寧をお願いすることを知っておいたほうがいいでしょう。</li> </ol>	該当なし

保育者 4	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 観察と理解:仲間外れにされた子どもと他の子どもたちとのやりとりを観察し、実際に何が起こったのか理解するために彼らと話し合い、その背後にある理由を理解しようと努めます。</li> <li>2. 信頼関係の構築:仲間外れにされた子どもと相互信頼という前向きな関係を構築します。日々のコミュニケーションの中で、子どもの長所や努力を誉めるようにし、尊重され受け入れられているという精神的な支えを感じられるようにします。</li> <li>3. 教育と指導:子どもたち全員と集団活動や話し合いを行い、思いやり、尊敬、協力の大切さを教え、子どもたちが他人の立場で考えられるように指導します。</li> <li>4. 交流の奨励:グループ活動を企画し、子どもたち全員に参加するよう励まし、子どもたちの交流とコミュニケーションを促進します。この過程で、仲間外れにされた子どもに特別な注意を払い、特別な励ましとサポートを与え、集団に溶け込めるようにします。</li> </ol>	該当なし
保育者 5	保育者は1対1で話を聞く方法を取り、子どものニーズに耳を傾け、心理状態を理解して、指導戦略を立てます。通常、仲間外れにされた子どもは気分が落ち込んでいるので、保育者が慰め、前向きな気持ちになるよう励ましを与える必要があります。1対1で話を聞くことによって子どもが内面の感情を打ち明けられるようにし、子どもの真のニーズに注意を向け、集団に溶け込むのを手助けします。	該当なし

表 10 をみると、5 名の園長のうち 3 名がシナリオ 1 を選択したことが分かる。シナリオ 1 における彼らの対応方法は、「原因を理解すること」と「話を聞き、気持ちを落ち着かせること」に焦点を当てており、その手段として会話とゲームを挙げている。園長たちは、幼さを理由に挙げた 1 名を別として、行動のメタ認知について言及しなかった。

保育者に関しては、5 名全員がシナリオ 1 を選択し、マクロレベルでは「信頼」と「相互作用」、ミクロレベルでは「観察」と「調査」(聞き取り)に焦点を当てた様々な対応法を挙げている。これは、中国教育部が現在公布している政策概念とも一致している。ただし、1 名の保育者は尋ねられたことに答えなかった。また、保育者のいずれも選択行動の背後にあるメタ認知について言及しなかった。

表 11:シナリオ 2「友達と喧嘩した」

このシナリオを選んだ参加者	保育者としてどう関わるか	それはなぜか
園長 1	子どもたちの喧嘩は集団生活の中でよく起こります。私は、保育者がまず観察し、あまり介入せず、子どもたちに自分で解決させるほうがよいと考えています	該当なし

園長 2	私は喧嘩の理由を尋ね、喧嘩した子どもたちのニーズや感情を理解し、子どもたちが相手の立場で考え、一緒に解決策を話し合うように指導します。	該当なし
園長 3	私は子どもたちの喧嘩の理由を理解しようと努め、絵本やビデオを使って、友達同士で喧嘩するのは普通のことだと理解できるように手助けします。「喧嘩したら、その後どうすればいいかな？ 仲良しの友達に打ち明けたり、ぬいぐるみに気持ちをぶついたりしたらどうかな」と話します。私は喧嘩の理由と相手に対する意見を理解するよう努めます。そして、子どもたちに相手に謝って、和解する方法を考えてもらいます。	該当なし
園長 4	まず子どもに自分の気持ちを話してもらい、ネガティブな感情を吐き出させ、気持ちを落ち着かせます。次に、仲良しの友達と喧嘩した理由を尋ね、自分の落ち度を見つけ、相手の視点から考えるように指導します。また、仲良しの友達と仲直りするために、率先して行動するよう励まします。子ども同士が喧嘩する時はそれぞれに理由があること、友達の良いところを考える必要があることを理解しなくてはなりません。	該当なし
保育者 1	私は喧嘩の理由を理解しようと努め、そうすることが正しいかどうか、相手を許せるかどうか考えるよう促し、最終的には子ども自身に決めさせます。	該当なし
保育者 2	喧嘩した子どもたちについてもっと知るようになります。保育者は子どもたちをより良く理解し、信頼関係を築くために、子どもたちの趣味、生活習慣、学習の進捗状況などを知っておく必要があります。保育者は子どもたちが自分の意見や表現が尊重され、注目されていると感じられるように、積極的に子どもたちの話に耳を傾ける必要があります。保育者は子どもたちに前向きなフィードバックと励ましを与える必要があります <sup>5</sup> 。	該当なし
保育者 3	子どもの考えに耳を傾け、気持ちを理解するよう努め、感情を抑制する方法を学ぶよう指導しています。  子どもが友達と喧嘩するのは非常によくみられる現象です。子どもが友達と仲違いする理由は様々です。まず、この問題について子ども自身の考えに耳を傾ける必要があります。子どもに自分の理由を説明するよう促し、次に相手の立場で考えるように尋ねます。「あなたが相手の立場だったら、これが正しいと思うかな？」と。保育者は子どもたちがお互いを理解し、正しい道を見つけられるように指導する必要があります。	該当なし
保育者 4	1. まず、喧嘩している子どもたちをすぐに引き離して安全を確保し、これ以上喧嘩したり怪我したりしないようにします。  2. 落ち着かせる:それぞれの子どもの気を静めるように深呼吸やリラックスできるような動きをするよう指導して、落ち着きと理性を取り戻し、効果的に話し合いができるようになります。  3. 双方の考えを聞く:それぞれの子どもの意見や気持ちに耳を傾け、それぞれに自分を表現する機会を与え、客観的で公平な立場を維持します。そうすることで、子どもたちは尊重され、耳を傾けられていると感じ、同時に相手の立場をもっと理解できるようになります。  4. 一緒に問題を解決するよう励ます:子どもたちに喧嘩の対処法について考えるよう指導し、協力とコミュニケーションを通じて合意に達するよう促します。	該当なし

<sup>5</sup> この保育者は質問に答えておらず、国家政策文書から文章をコピーしただけである。

	たとえば、保育者は双方が受け入れられる解決策を見つけるのを手伝ったり、ロールプレイやその他の方法で喧嘩を解決する場면을シミュレーションさせたりすることができます。	
保育者 5	子どもたちが喧嘩をした場合、保育者はまず子どもたちの発達段階を観察します。子どもたちが自分で問題を解決できる場合、保育者は喧嘩に介入しません。子どもにとって喧嘩は普通のことであり、社会的インタラクションの重要な部分でもあり、相手を理解するための重要な手段です。子どもたちが自分のやり方で問題を解決できるようにすることで、子どもたちは喧嘩を解決する方法を覚えることができます。子どもたちの喧嘩が激しくなった場合、保育者は気持ちをなだめさせるために、2人を教室の「落ち着くコーナー(calm down corner)」に連れて行きます。まず、保育者は子どもたちに喧嘩について自分たちで話したり、本を読んだりするように促し、興奮した感情を落ち着かせます。そして、子どもたちに問題や喧嘩について意見を交換させます。子どもは、激情がおさまるまでは、お互いを理解する余裕がないからです。	該当なし

表 11 をみると、5 名の園長のうち 4 名がシナリオ 2 を選択したことが分かる。これは、子どもたちの間で喧嘩は極めてよく起こることであり、園長たちの注意を引いていることを示している。喧嘩の場面における彼らの対応方法は「原因の理解」と「観察」のプロセスに焦点が当てられており、主に会話、絵本、ビデオを手段にしている。こうした行動のメタ認知については誰も言及しなかった。

保育者に関しては、5 名全員がシナリオ 2 を選択し、「理由を理解する」、「和解を待つ」、「協力を促す」に焦点を当てた様々な対応方法を挙げていた。これは、中国教育部が現在公布している政策概念とも一致している。ただし、1 名の保育者は尋ねられたことに答えなかった。また、保育者のいずれも選択行動の背後にあるメタ認知(またはこのシナリオを選んだ理由)について言及しなかった。

表 12: シナリオ 3「親しい周囲の人が引っ越していなくなってしまった」

このシナリオを選んだ参加者	保育者としてどう関わるか	それはなぜか
園長 2	仲の良い友達や大好きな先生が遠くに引っ越すのは普通のことだとその子に話します。いつでも連絡を取れる方法がたくさんあることも。だからあまり悲しまないように。	該当なし
園長 4	私は子どもたちに引っ越していく仲良しの友達と連絡先を交換するように勧めます。電話番号、新しい住所、親の WeChat などです。また、今後どのように連絡を取り合えばいいかということを当人と話し合うよう、子どもたちを指導することもできます。そうすれば、引っ越した後も仲良しの友達を定期的に訪問したり、こちらに来るよう招待したりすることができます。	該当なし
保育者 3	子どもたちの身近な人が引っ越していく場合、保育者は情操教育の貴重な機会を大切にすべきです。まず、子どもたちに引っ越しの意味を理解させます。引っ越しとは旅立ちであり、仲良しの友達との別れを意味します。子どもたちが「旅立ち」	該当なし

	<p>について基本的な理解を得るようにし、それから子どもたちがその経験をどのように表現するかを観察します。教室の子どもたちが別離の後に悲しみや動揺の気持ちを味わうことが予測できる場合、保育者は共感力の高い子どもたちに自分の考えを述べさせます。「旅立ち」の意味を理解できない子どもたちには、絵本やその他の媒体を通じて旅立ちの背後にある感情を理解させます。子どもたちがこうした感情に向き合い、旅立ちの前に友達との美しい瞬間を記憶にとどめる方法を考えるよう手助けします。</p>	
--	--	--

引っ越しという状況が比較的まれであったため、5名の園長のうち2名のみがシナリオ3を選択した。彼らが採用している主な方法は、話しかけること、励ますことであった。行動のメタ認知に関する部分については回答がなかった。

保育者たちに関しても、シナリオ3を選択した保育者は同じ理由で1名のみであった。この保育者の対応方法は、まず子どもたちに「別れ」の意味を理解させ、次に観察、分析を行う。「別れ」の理解度が異なる子どもたちには、適切な手段を用いて彼らの理解を深め、「別れ」を受け入れやすくするよう手助けしていた。

表 13:シナリオ 4「家庭内で辛いことがあった」

このシナリオを選んだ参加者	保育者としてどう関わるか	それはなぜか
園長 3	<p>保育者は状況を理解した後、適切なタイミングで安心できるような言葉をかけてあげます。例えば、「心配しないで。確かに悪いことをしたけど、ちゃんと正せるでしょう。ママとパパはあなたをととても愛しているよ」、「あなたは賢い子だから、将来はやり方が分かるようになるよ」、「私も子どもの時に同じ間違いをしたけど、その後は…」などです。また、保育者は子どもの手を握ったり、肩をたたいたり、笑顔を向けたり、ハグしたりすることもできます。</p>	<p>子どもは間違いを非難されると気持ちが落ち込みます。しかし、大人の対応次第で、子どもは間違いを犯しても親が自分を愛し、信頼してくれていると感じ、自分に自信をもてるようになります。</p>
園長 5	<p>私は保育者としてまず子どもの悲しい気持ちを慰め、子どもが普段興味をもっているおもちゃを見せながら対応します。子どもの気持ちが落ち着いたら、何が起こったのか、なぜ悲しいのかを尋ねます。</p>	<p>未就学児は感情をコントロールする力が弱く、言語表現力も十分に発達していないため、いったん外部の要因や状況に晒されると、感情が爆発し、突然泣き出したり笑ったりするなど、感情の大きな揺さぶりが起こります。そのため、まず子どもの気持ちを落ち着かせてから、話しかける必要があります。良好なコミュニケーションや心のふれあいが非常に役立ちます。</p>

表 13 は、保護者に叱られることはよくあることなので、それに対する子どもの感情は長く続かず、幼稚園で気づくのは難しいことを示している。そのため、5名の園長のうち2名のみがシナリオ4を選択している。園長たちの典型的な対応方法として、言葉やボディランゲージで子どもを慰

めることが挙げられた。行動のメタ認知の1つは子どもの自信を守ることであり、もう1つは子どもの情緒発達の観点からアプローチすることで、いずれもよく説明されていた。

シナリオ4を選択した保育者はいなかった。

#### 4.2.3 「レジリエンス」に関する評価とフィードバックについての調査結果

インタビューでは「レジリエンス」に関してさらに、「評価」と「フィードバック」の2項目についても取り上げた。表14は、この2つの項目に関する調査結果をまとめたものである。

表14:「レジリエンス」の評価と保護者へのフィードバック

回答者	子どものレジリエンスの測定／評価／ふり返り	子どものレジリエンスの到達度合に関する保護者へのフィードバック
園長 1	回答なし	該当なし
園長 2	知らない	該当なし
園長 3	回答なし	私たちは、子どもが教室で感情的に興奮したり落ち込んでいたり、あるいは心理的／情緒的な問題を抱えていることが分かった場合、保護者に連絡して家庭の状況を尋ね、保護者とも関わりをもちながら、対応してもらいます。幼稚園は保護者と協力して、子どもが感情をコントロールできるように手助けします。
園長 4	私は、子どもが直接見せる感情表現、表情、体の動き、書くものから、子どものレジリエンスのレベルを評価します。次に、友達とのやりとりなども観察します。現在、当園には子どものレジリエンスを測定する適切なツールはありません。	回答なし
園長 5	該当なし	該当なし
保育者 1	よく知らない	よく知らない
保育者 2	回答なし	回答なし
保育者 3	よく知らない	該当なし
保育者 4	聞き取り、ツール無し	電話面談
保育者 5	フォローアップ観察と感情調整力に焦点を当てる	親にフィードバックを伝えます(特に、レジリエンスに関連する大きな出来事があった場合など)。子どもの感情に影響を与えるような特定の出来

	事を指摘する時は、子どもの動的な感情の変化が親へのフィードバックになります。
--	--

表 14 をみると、3 ヲ所の幼稚園から参加している 5 名の園長のうち、観察などの方法で「レジリエンス」を観察、評価していたのは、そのうちの1つに所属する園長と副園長のみであった。また、保護者にフィードバックを行っていたのは 1 ヲ所の幼稚園のみであった。その幼稚園はメンタルヘルス教育を行っていたため、「レジリエンス」に高い関心を寄せていた。しかし、3 ヲ所の幼稚園のいずれも正式な評価ツールをもっていなかった。

子どもたちのレジリエンスを観察・追跡していたのは、男性の保育者 1 名のみであった。しかし、保護者へのフィードバックでは、「レジリエンス」の意味は「大きな心理的变化」と同等にみなされていた。従って、保育者たちは「レジリエンス」の意味をあまり理解しておらず、保護者へのフィードバックも感情面の変化に重点が置かれていると推測される。

## 5. まとめと考察

社会情動的スキルとレジリエンスの理解度を調査した結果、園長たちは幼児の社会情動的スキルについてある程度理解しており、感情認識、感情マネジメント、共感力の 3 要素、そしてレジリエンスを関連付けている。一方、現場保育者たちにとって社会情動的スキルは馴染みのない言葉であった。園長たちは、幼児の育成方法において、能力、年齢、浸透性の観点から、自らの文化伝統を取り入れ、幼児の社会情動的スキルを育むことが必要であると考えていた。

園長たちは「自己治癒力」や「自己管理・抑制」などの側面からレジリエンスの意味を理解することに重点を置いていた。レジリエンスの意味を知る主な方法としてインターネット、教育ソフトウェア、書籍、講義などが挙げられた。現場の保育者たちはレジリエンスという言葉をはほとんど知らなかったが、「レジリエンス」の2つの側面に関わる「困難」や「逆境」、さらには「スムーズな適応力」や「回復力」の状況についてはよく理解していた。

### 5.1 概念認識に関する調査結果のまとめ

#### 5.1.1 インタビューで得られた園長や保育者たちの「社会情動的スキル」に対する認識の回答

園長／副園長たちは「社会情動的スキル」という言葉についてある程度の知識をもっており、ほとんどが「感情」の観点から「心理的レジリエンス」の意味を理解しようとし、子どもの感情認識、感情マネジメント、共感力の 3 つの側面を「心理的レジリエンス」と、「社会性」の観点からは「社会的適応力」と関連付けていた。

一方、現場保育者たちに関しては、1 名の主任保育者を別として、「社会情動的スキル」は馴染みのない言葉であった。4 名のインタビュー対象者の回答はこの言葉について全く理解していないことを示していた。従って、現場保育者たちは「社会情動的スキル」の概念について教育を受ける必要がある。

園長たちは、教育学の観点から、幼児教育は伝統文化を活用するだけでなく、能力レベル、年齢差、イメージ指導を考慮して、子どもたちが高い「社会情動的スキル」を身につけるよう育成する必要があると考えていた。

園長たちの考えでは、「社会情動的スキル」が高い子どもとは、感情制御や社会的適応力を備えた子どもであるとしていた。

園長や保育者たちは皆、子どもの「社会情動的スキル」を育むことが非常に重要だと確信していた。

### 5.1.2 園長や保育者たちの「心理的レジリエンス」に対する認識の調査結果のまとめ

「レジリエンス」という言葉に対する園長たちの認識は洞察力に富んでおり、ほとんどが「自己回復力」と「自己管理・抑制」の側面から「心理的レジリエンス」の意味を解釈していた。

園長たちの「心理的レジリエンス」が高い子どものイメージは、自己抑制、自己回復力、自己統制を備えた子どもであった。

レジリエンスについて学んだ情報源として彼らが答えたのは、インターネット、教育ソフトウェア、書籍、講義と、多岐にわたっている。

子どもの「心理的レジリエンス」を育成する重要性については、全員の意見が一致していた。

一方、現場保育者や主任保育者たちにとって「心理的レジリエンス」は、1名の主任保育者を別として、馴染みのない言葉であった。彼らはこの言葉の意味について全く知らなかったのである。

しかし、彼らは「レジリエンス」の2つの側面、つまり「スムーズな適応力」や「回復力」の状況とも関わる「困難」や「逆境」についてはよく理解していた。

園長、主任保育者、現場保育者のいずれも「困難」と「逆境」の意味についてほぼ明確に説明している。曖昧な理解を示した保育者が1名いたものの、それ以外は皆、4～6歳児にとっての「困難」と「逆境」とは自分で制御、解決、対処できないことから生じる感情の不安定さや恐怖によって引き起こされる状況であり、勉強、生活、遊び、特に対人コミュニケーションや社会的適応力に反映されることを明確に認識していた。

4～6歳児の「うまく適応する」と「立ち直る」の理解において、園長と保育者との間に大きな差異はなかった。彼らは皆、「調整」や「回復力」などのキーワードに言及しており、主に4～6歳児の自己調整力や外の世界／大人の助けによる心理的な回復力に焦点を当てていた。

以上をまとめると、中国県級市の園長たちは「社会情動的スキル」と「心理的レジリエンス」についてある程度の理解があったが、現場保育者たちはこれらの言葉を十分に理解していなかった。ただし、4～6歳児の「心理的レジリエンス」に伴う2つの側面 — 否定的な「困難」「逆境」と前向きで「スムーズな適応力」「回復力」 — に対する保育者たちの認識はむしろ豊かであり、心理的レジリエンスの意味と一致していた。

## 5.2 「心理的レジリエンス」の応用と評価に関する実態調査のまとめ

### 5.2.1 「心理的レジリエンス」の概念の応用

全体的に見て、調査に参加した幼稚園はいずれも、「心理的レジリエンス」の概念を現場で応用することや、4～6歳児の「心理的レジリエンス」を評価して保護者にフィードバックを提供することが十分ではなかった。3カ所の幼稚園のうち、会話、絵本、保護者とのコミュニケーションを

通じて「心理的レジリエンス」概念の応用に取り組んでいるのは 1 ヶ所のみであった。幼稚園の大半が教科書を使用しておらず、省が作成した教科書を使用しているのは 1 ヶ所のみである。

保育者に関しては、3 名がレジリエンス概念の応用に取り組んでいるが、満足感を先延ばしにする、自信や心理教育の価値を高めるなどの取り組みは効果がないように思われた。

以上をまとめると、中国県級都市の幼稚園では「心理的レジリエンス」概念の応用、手法、教材の活用が依然として不足していることが分かった。このことは園長と現場保育者の両方に当てはまる。

### 5.2.2 選択したシナリオとその対応

この調査の結果のもう一つの特徴は、調査参加者が 4~6 歳児の心理的レジリエンスについて具体的な観察や対応を回答する際に、行動の背景にある「メタ認知」についてはほとんど言及していないことが挙げられる。

「心理的レジリエンス」に関する 4 つのシナリオのうち、大半の調査参加者が選んだのはシナリオ 1 とシナリオ 2 であった。

園長や保育者たちの対応では「原因を理解すること」と「話を聞き、気持ちを落ち着かせること」に焦点を当てており、その主な手段として会話とゲームを挙げている。園長たちは、1 名が子どもの幼さを理由に挙げているが、残りの 2 名は理由について言及しなかった。

保育者に関しては、5 名全員がシナリオ 1 を選択し、マクロレベルでは「信頼」と「相互作用」、ミクロレベルでは「観察」と「調査」(聞き取り)に焦点を当てた様々な対応方法を挙げている。これは、中国教育部が現在公布している政策概念とも一致している。選択行動の背後にあるメタ認知については、保育者のいずれも言及しなかった。

シナリオ 2 については、5 名の園長のうち 4 名が選択している。子どもたちの間で喧嘩は極めてよく起こることであり、園長たちの注意を引いていることが分かる。彼らの対応方法は「原因の理解」と「観察」のプロセスに焦点が当てられており、主に会話、絵本、ビデオを手段にしていた。こうした行動のメタ認知については誰も言及しなかった。

保育者に関しては、5 名全員がシナリオ 2 を選択しており、彼らも「理由を理解する」、「和解を待つ」、「協力を励ます」に焦点を当てた様々な対応方法を挙げている。これは、中国教育部が現在公布している政策概念とも一致している。ただし、1 名の保育者は尋ねられたことに答えなかった。また、保育者のいずれも選択行動の背後にあるメタ認知(またはこのシナリオを選んだ理由)について言及しなかった。

シナリオ 3 については、5 名の園長のうち 2 名のみが選択している。彼らが採用している主な方法は、話しかけること、励ますことであった。行動のメタ認知については回答がなかった。保育者に関しても、シナリオ 3 を選択した保育者は 1 名のみであった。この保育者の対応方法は、まず子どもたちに「別れ」の意味を理解させ、次に観察、分析を行う。「別れ」の理解度が異なる子どもたちには、適切な手段を用いて彼らの理解を深め、「別れ」を受け入れやすくするよう手助けしていた。

シナリオ 4 については、5 名の園長のうち 2 名のみが選択している。園長たちの典型的な対応方法として、言葉やボディランゲージで子どもを慰めることが挙げられた。行動のメタ認知の 1

つは子どもの自信を守ることであり、もう 1 つは子どもの情緒発達の観点からアプローチすることで、いずれもよく説明されていた。シナリオ 4 を選択した保育者はいなかった。

### 5.2.3 評価とフィードバックに関する調査結果

調査の結果、4～6 歳児向けの「心理的レジリエンス」の評価ツールがなく、保護者へのフィードバックも不適切であることが判明した。

3 ヲ所の幼稚園から参加している 5 名の園長のうち、観察などの方法で「心理的レジリエンス」を観察、評価していたのは、そのうちの 1 つに所属する園長と副園長のみであった。また、保護者にフィードバックを行っていたのは 1 ヲ所の幼稚園のみであった。その幼稚園はメンタルヘルス教育を行っていたため、「心理的レジリエンス」に高い関心を寄せていた。しかし、3 ヲ所の幼稚園のいずれも正式な評価ツールを持っていなかった。保育者に関しては、子どもたちのレジリエンスを観察・追跡していたのは、男性の保育者 1 名のみであった。

この調査が私たちに伝えるメッセージは、中国の幼児教育、特に県レベルでは、園長や保育者たちに「社会情動的スキル」と「心理的レジリエンス」の概念を教育することが非常に必要であるということである。この 2 つの概念に対する幼稚園の園長や保育者たちの理解と応用を改善するためには、様々な対策を講じる必要がある。この 2 つの概念は、子どもたちの社会性の発達において重要なキーワードであるため、保育者たちは幼児教育の実践において子どもたちが「社会情動的スキル」を習得し、「心理的レジリエンス」を育むことを促進すべきである。

また、この 2 つの概念の応用に関する調査の結果、調査に参加した園長や保育者たちは、現場におけるレジリエンス概念の応用が比較的低水準にあることが判明した。中国の県級幼稚園では、レジリエンス概念の応用、手法、教材の活用が依然として不足しているのである。